

コロナ禍の新日美特集【第3報】

歩んで来た絵の道 委員 陳 俱子



陳 俱子

学生時代、科目の自由選択で美術を取る。授業はデッサン、水彩、木彫で、高価な油絵は無かったが楽しくて夢中だった。

油絵を始めたのは子供が小的时候、仲良しのお母様の家に絵の先生が来ているとの事、頼んで教わるが時がたち、先生の事情でおやめになった。その後先生の友人を紹介されアトリエに学びにいった。

何年かたち、主人の友人から老人達に絵を教えてほしいと依頼され、先生に相談すると「教える事は学ぶ事」と賛成してくださり、一人では自信が無く友人三人で一人前として、二〇人位の生徒さんにやさしく物を写す事から始めた。

楽しく自由に描く事で教える方も楽しんでいたが、ご老体なので通うのも大変、体力的な事も

有り五、六年の間に生徒さんが減り私共の方から退職する事になった。

その後も年賀の交流はあり、習いたい人にはアトリエを紹介、その後も時がたち先生の事情で解散、友人二人で東京芸大出身のカルチャースクールで二〇〇五〇号位の大作教室に通う。

クロッキー、油絵と学ぶも又他のカルチャーにも通い、気がつくとも自分もご老体の年になった。一〇〇歳まで描けると本望と思ってもコロナの時期、避けられるものなら避けたい。



若かりし頃描く、あんずの里

公募展は作品を出品するのは大丈夫だが、都美館の地下での仕事をする方々は命がけの様な気がする。早くコロナ終われと祈りたい。

定点カメラ

委員 児玉 八千穂



児玉 八千穂

ネコを飼っていないのにネコを描くため、「写真を見て描くのか」とよく聞かれるが、答えは否である。写真を撮ろうとしても逃げられるし、撮れても、ブレて目が四つのような化け猫写真ばかり。

またプロの写真も映像も、所詮は他人の構図だ。そもそも写真には歪みがある。では、どうしたら動き回るモノを描けるのか。昔の絵師の中には、飛び回る小鳥などは死骸を写生したことが伝わっているが、基本的な体の造りを理解するために、解剖学的知識が必要となる。

デジカメもスマホも無い昔、動物園でトラをスケッチした時の経験から気付いたのが、獣の基本的な骨格を頭に入れてから、定点カメラのように顔を動かさな

だ。

檻の中のトラは何度も同じコースを辿って歩き回るから、描きたい部分を定めて、見えた瞬間描く。顔だけ、前足だけのよう。やがてピースを繋ぎ合わせ、見えなかった部分は頭の中で補完して全体像となる。

さて近年、猫カフェという便利なものが出来たので、細部がよく解るようになった。他の客や物陰、そして薄暗いという悪条件で、スケッチはまず出来ないで、ネコにどんなに嫌われようとも、定点カメラでじっくり見るのだ。

最後に、なぜネコを描くようになったのか。昔、風景画のスケッチの際、白い野良猫が襲来した。筆洗の水を飲む、私の靴の上に座るで、じゃああんたを描こうと向き直ったら、嘲笑うかのように逃げられた。それ以来、定点カメラとなつて追い求めているのだ。

「猫カフェの子猫
戯れる一秒前」